

【研究報告】

談話から見た主節と関係詞節の情報伝達の特徴

女 鹿 喜 治*

【要 旨】

本論では、不定的な関係詞節と主節の談話の中での情報伝達の特徴を探り、次のような知見を得る。

関係詞節を背景型と連続型に分けた場合、背景型の一部は主節の前景となり、物語的つながりを持つものがある。このような関係詞節は前景型と言える。関係詞節が前景型の場合、主節の中に位置する副詞類は主節を飛び越して関係詞節を修飾することがある。また、接続詞が主節ではなく、関係詞節の意味内容に言及することもある。主節に十分な情報量がなかったり、語用論的に不適切な時、主節は関係詞節の伝達する情報の下地作りをし、背景となる。主節に十分な情報量がある時には、談話内容によって背景にも前景にもなる。連続型の関係詞節の場合、主節から関係詞節へと談話が流れていくためには、主節は十分な情報がなくてはならない。関係詞節と主節のどちらが背景となり、また、前景となるかという判断は単一の文ではなく、談話内容が最終的な決め手になる。

【キーワード】 relative clauses, main clauses, foreground/background, discourse

1. はじめに

不定的な関係詞節を含む文では、主節ばかりでなく、関係詞節、あるいは、その両者が断定される。特に、文末焦点や文末重点が置かれると、関係詞節は主節よりも断定的になり、重要な情報を担うことになる。そして、最終的に、主節と関係詞節のどちらが断定されるのかはその文を含む談話(discourse)によって決定される。しかしながら、関係詞節が談話と具体的にどのように関わり、主節はどのような機能を果たすのか、また、それに関連する文法現象にはどのようなものがあるのかについてはまだ不明確なことが多い。この小論では、福地(1995, 2001, 2003)の議論を基に、そのような関係詞節と主節の談話の中での情報伝達の特徴の一端をさらに明らかにしてみたい。

2. 先行研究と疑問点

(1) のような定的な関係詞節は旧情報となり、前提が与えられる。この場合、関係詞節は主節の中の先行詞を修飾し、その意味内容を補足する要素となるため、統語的には、主節に対して従属的な関係になる。したがって、主節が断定的になるのは当然のことと言える。

(1) I know the girl *who speaks Basque*.

(Hooper and Thompson, 1973, p. 491)

だが、(2) のような不定的な関係詞節は、(1) のような定的な関係詞節とは異なり、主節の表す情報伝達に近い機能を持ち、断定される。

(2) I know a girl *who speaks Basque*.

(Hooper and Thompson, 1973, p. 491)

このような不定的な関係詞節の断定性は、(3) の倒置、(4) の話し手の陳述態度を示す離接詞(disjunct)の出現によって裏付けられる。

(3) I saw a dress *which under no circumstance would I have bought*.

(Hooper and Thompson, 1973, p. 490)

(4) John's bought a painting *that frankly I find ugly*.

(Fairclough, 1973, p. 528)

福地(1995, p. 116)によると、このような関係詞節は「話し手にとって主節と同等の重みを持って伝えられる」。

このような断定的な関係詞節には二つの型が存在する。

(5) a. 主節の内容の「背景」型

b. 主節の内容に続く「連続」型

(福地, 1995, p. 117)

福地(1995, p. 117)は、主節と関係詞節の表す内容を出来事(event)として捉えた場合、(5b)の連

* 日本赤十字広島看護大学

続型では、主節と関係詞節の間に物語的 (narrative) なつながりがあるのに対し、(5a) の背景型にはないと述べている。これまでに挙げた例では、背景型の関係詞節は (2)-(4)、連続型は (6) となる。

(6) She returned holding a glass of colorless liquid *which she held out to me*.

(福地, 1995, p. 116)

主節の出来事を E-1、関係詞節の出来事を E-2 とすると、(2)-(4) では、E-1 (「私は女の子に会った」, 「私はドレスを見た」, 「ジョンは絵を買った」) と E-2 (「(その女の子は) バスク語を話す」, 「とても (そのドレスを) 買うことはない」, 「(その絵は) 正直なところ醜い」) の間には出来事の連続性は何も感じられない。これらの関係詞節は断定的ではあっても、ただ単に先行詞に関する情報を付随的に補っているに過ぎない。ところが、(6) では、E-1 (「彼女は無色の液体の入ったグラスを持って戻ってきた」) と E-2 (「彼女はそのグラスを私に差し出した」) が時間的な流れに沿って連続的に記述されている。この点で、両者の間には物語的なつながりが生じている。

(7) も連続型の関係詞節の例である。

(7) Fathers and mothers still balance thick shoulder poles with buckets hanging on the sides to fetch water *that they then store in a hole in the ground of their home*.

(New York Times) (福地, 1995, p. 188)

ここでは、E-1 と E-2 の間に起きている出来事の連続性は、関係詞節の中の *then* が主節の *fetch water* と意味的に関連することによって、さらに明確となっている。また、(8) の関係詞は直前の主節全体を先行詞とするという点で (6)-(7) とは異なるが、同じ連続型である。

(8) Ann defeated the World Champion in a game *that sent the sellout crowd into a frenzy*.

(福地, 1995, p. 188)

背景型の関係詞節は断定的であっても、連続型とは違い、先行詞を修飾する。そのため、(9) の第 3 文のように、主節の伝達内容の一部となる。

(9) At the end of World War II, Forrestal was convinced that Israeli secret agents were following him everywhere. His physicians, equally convinced of the absurdity of this *idée fixe*, diagnosed him as paranoid . . . Later it was discovered that Forrestal was indeed being followed by Israeli agents *who were worried that he might reach a secret understanding*

with representatives of Arab nations. Forrestal had other problems, but having his valid perception labeled paranoid did not help his condition.

(Carl Sagan, *The dragons of Eden*, p. 190)

(9) の談話の流れは大体次のようになる。(便宜上、第 *n* 文は *Sn* のように表す。例えば、第 1 文は *S1* となる。MC は主節 (main clause)、RC は関係詞節 (relative clause) を表す。)

「フォレストルはイスラエルのスパイが自分を尾行していると思っていた」(*S1*) → 「医者は被害妄想症だと彼を診断した」(*S2*) → 「アラブ諸国の代表たちと密かな申し合わせを行うのではないかと心配した (RC) イスラエルのスパイにフォレストルは実際に尾行されていたことがその後判明した (MC)」(*S3*) → 「フォレストルは他にも問題を抱えていた」(*S4a*) → 「だが、彼の正しい認識が被害妄想症とされたために病状は改善しなかった」(*S4b*)

第 1-2 文と第 4 文の出来事が連続的になるのは第 3 文の主節 (「イスラエルのスパイにフォレストルは実際に尾行されていたことがその後判明した」) との間であって、関係詞節 (「アラブ諸国の代表たちと密かな申し合わせを行うのではないかと心配した」) ではない。つまり、第 1 文と第 2 文によって表された出来事は第 3 文の主節を経由して、第 4 文へと連なっている。なぜなら、第 3 文の主節を省略すると、談話の流れが途絶えてしまうからである。

さらに、女鹿 (2002, pp. 144-5) によると、断定的な関係詞節には (5a, b) 以外にもう一種類ある。談話の流れから見ると、出来事の連続性が (5b) のように主節ではなく、関係詞節と前後の文との間で生じることがある。このような関係詞節は (5a, b) のいずれにも当てはまらず、主節の内容の前景となる。(10) はアップルというコンピューター会社の最高経営責任者のスカリーという人物についての記述である。

(10) Sculley had been fascinated by electronics ever since childhood, but he was not a technologist, nor was he ever accepted as one by Apple's engineering community. Still, Sculley was reading a report by the McKinsey & Company consulting firm one day in early 1990 *that, he concluded, applied squarely to him*. "It said that the chief technology officer of a corporation is the person who has to deal with the consequences of technology from a

business standpoint, not the best technologist," Sculley remembers. (Jim Carlton, *Apple*, p. 136)
(10) の談話の流れはおおよそ次のようになる。

「スカリーはエレクトロニクスに強い興味があったが、科学技術者でもなかったし、アップルの技術部門の一員として受け入れられてもいなかった」(S1) → 「それにもかかわらず、1990年代の初めの頃、マッキンゼーというコンサルタント会社のレポートを読んでいたところ (MC)、自分にぴったり当てはまっていると思わざるを得ない記述に出会った (RC)」(S2) → 「そこには、『企業の最高技術責任者とはビジネスの観点から技術の成果を論じなければならない人物であって、最も優れた科学技術者ではないと書いてあった』とスカリーが回想した」(S3)

談話内容から、still (「それ (スカリーは科学技術者でもなく、アップルの技術部門の一員として受け入れられてもいなかった) にもかかわらず」) は主節を飛び越して、関係詞節とそれに後続する第3文の意味内容について言及している。このため、第2文では、主節 (「マッキンゼーのレポートを読んでいた」) よりも、関係詞節 (「自分にぴったり当てはまっていると思わざるを得ない記述に出会った」) の方が主な伝達情報として解釈せざるを得ない。実際、この関係詞節の意味内容が第1文と第3文に関わり、両者の間に出来事のつながりが無理なく感じられる。このため、第2文の主節は関係詞節の意味内容に対して背景的であり、関係詞節は前景的となる。換言すると、第2文の関係詞節は「主節の内容の背景」 (= (5a)) どころか、逆に、「主節の内容の前景」を表すと言わざるを得ない。

以上の先行研究から、次のような疑問点が浮かび上がってくる。背景型と連続型の関係詞節の差はどこから生じるのだろうか。また、談話内容と物語的つながりを持つ (10) のような前景型の関係詞節とそうでない (9) のような背景型の関係詞節とは何が異なるのだろうか。そして、前景型の関係詞節の場合、主節にはどのような特徴が見られるのだろうか。次の3-6節では、談話を考慮しながら、断定的な関係詞節を含む文の具体例を検討してみる。

3. 談話から見た主節と関係詞節

これまで挙げた例のように、関係詞節か主節、あるいは、その両方が談話との間で出来事の連続性や論理的関係を持つ場合、それぞれの間には意味論的・語用論的な関係が生じることになる。これは主節や関係詞節によって表される出来事が談話の中で切れ

目なく伝達されて行くことを意味する。逆に、主節や関係詞節が談話の流れ (文と文との物語的つながり) の中にあるかどうかは、その前後の文と意味論的・語用論的なつながりがあるかどうかによって判断できるはずである。

第2節から、主節と関係詞節の談話との関わり方には、福地 (1995) の (5a, b) 以外にもう一つあるため、次の三通りが存在する。

(11) 談話の流れの中にあるのは

- a. 主節のみ (= (5a)) (主節の内容の背景型)
- b. 関係詞節のみ (主節の内容の前景型)
- c. 主節と関係詞節の両方 (= (5b)) (主節の内容に続く連続型)

これまで挙げた例では、(2)-(4) と (9) が (11a), (10) が (11b), そして、(6)-(8) が (11c) に対応する。((2)-(4)については後で改めて検討する。) 次節では、この (11b-c) の具体例を検討する。

4. 主節のみが談話の流れの中にある場合

(11a) の具体例はすでに (9) を例にして述べているが、この場合、関係詞節は先行詞によって表される対象の集合をその部分集合に限定する機能を果たす。(9) の第3文では、関係詞節は「イスラエルのスパイ」の集合を「(アラブ諸国の代表たちと秘密の協定を結ぶのではないかと心配した) イスラエルのスパイ」という部分集合に限定している。つまり、関係詞節はどのようなイスラエルのスパイなのかを特定する (identify) 機能を果たし、主節の中の先行詞 (「イスラエルのスパイ」) と共に一体化し、単一の意味内容を表す。いずれにしても、このような関係詞節は談話の流れの中にはない。

4. 関係詞節のみが談話の流れの中にある場合

(11b) の具体例として (12) の第1文があげられる。これは関係詞節が断定されているという点で、主節に断定のある (9) とちょうど正反対の例と言える。

(12) Computers are now being developed in the United States *that will be able to detect and diagnose their own malfunctions*. When systematic performance errors are found, the faulty components will be automatically bypassed or replaced. Internal consistency will be tested by repeated operation and through standard programs whose consequences are known independently; repair will be accomplished chiefly by redundant

components.

(Carl Sagan, *The dragons of Eden*, p. 220)

第2-3文のおおよその談話の流れを見てみよう。

「コンピュータ・システムの作動にエラーが見つかり、欠陥のある部品には自動的にデータが供給されなくなるか交換されるだろう」(S2) → 「コンピュータ内部の不具合な部分が調べられるだろう」(S3a) → 「(そして,) 主に、予備の部品によって修理がなされるだろう」(S3b)

この談話内容から、第1文の主節

「コンピュータが現在開発中である」(MC in S1)

よりも、関係詞節の

「(現在開発中の) コンピュータは自分の動作不良を感知し、診断できるようになるだろう」(RC in S1)

の方が第2-3文の意味内容と結び付くと考えるのが自然である。このため、談話に関わるのは主節からではなく、第一文の関係詞節からとなる。

第1文は外置文 (extraposed sentence) で、関係詞 *that* の先行詞は主節の *computers* である。関係詞節が外置されると、主節とは別個の情報伝達機能を持ち、後続する談話内容と関わるようになる。外置構文の主節と関係詞節の結び付きは緩く、独立性が強くなる。主語の位置から外置された関係詞節は際立ち (prominence) が与えられ、前景 (foreground) となり、情報伝達の中心となる。その一方で、主節は背景 (background) となる。

ところで、関係詞節が外置された文の主節は提示文 (presentational sentence) の機能を持つ。提示文は話題 (topic) となる指示物 (referent) を談話の中に導入し、それを聞き手に意識させることによって、談話の起点とする。主語は不特定の、動詞は一般的に「出現」か「存在」の意味を表す。(12) では、第1文の主節 (*Computers are ... the United States*) がその提示文で、指示物は *computers* である。また、動詞 (*are now being developed in the United States*) の意味内容は出現というよりも存在に準ずる。

その一方で、主節に後続する外置された関係詞節は叙述文 (predicational sentence) である。叙述文は提示文によって談話の中に新たに導入された指示物について何らかのコメントをする機能を持つ。第1文では、この関係詞節 (*that will be ... malfunctions*) は先行詞 (*computers*) についてコメントを行っている。後続する第2-3文も同様に叙述文である。

ここで注意すべきは、主節の「コンピュータがア

メリカで現在開発中である」という意味内容は単独では十分な伝達内容を伴っていないということである。少なくとも、語用論的には不十分である。このように、主節が不十分な意味内容を持つ場合があることは福地 (1995, 2003) が既に指摘している。

(13) *Knowing his forces are no match for the power of the allies, Saddam employed maneuvers that suggest he has learned lessons from the first Gulf War.*

(*Time*, 04/07/03) (福地, 2003, p. 205)

主節の *Saddam employed maneuvers* の意味が「サダム・フセイン (大統領) は策を採った」となることから分かるように、福地 (2003) は「(この主節には) 語用論的にはほとんど伝達に値する情報量はなく、いわゆる関連性 (relevance) が低い」と述べている。これと同じことは外置文である(12)の第1文についても言える。

では、このように主節の情報量が不十分な場合、主節はどのような機能を持つのだろうか。

(14) a. *I know a girl who speaks Basque.* (= (2))

b. *A girl I know speaks Basque.*

(Hooper and Thompson, 1973, pp. 490-491)

(14a) では、主節は単独では伝達する情報量が充分ではない。意味は「私はある女の子と知り合いだ(私にはある女の子の知り合いがいる)」で、統語論的には問題ない。だが、語用論的には、「女の子」について何か一言足りないような印象を聞き手に与えてしまう。その一言とは、関係詞節の「バスク語を話す」という意味内容である。したがって、(14a) では、主節で「女の子」に関する情報(「(女の子と) 知り合いだ」)を聞き手に意識させてから、関係詞節で「その子はバスク語を話す」という叙述内容を伝達するという二段階の情報伝達の仕方をしていく。(14a)は主節に関係詞節が続くことによって、初めて充分な情報量を持つ文となっている。

(14a)は(14b)と知的意味 (cognitive meaning) が同じため、(14a)と同様のことが(14b)でも起こっている。(14b)の *I know* は(5a)の背景的な関係詞節であることに注意せよ。)これは、(14a)の *I know a girl* と(14b)の *A girl I know* の情報伝達内容が同等であることを意味する。

この解釈を(12)の第1文に当てはめると、「アメリカで現在コンピューターが開発されている」と述べてから、「それは自分の動作不良を感知し、診断できるようになる」と伝えるという二段階の情報伝達が行われていることになる。ただし、主節はコンピューターの存在を聞き手に意識させるという提

示文としての機能を果たすのが主で、それ以外の伝達内容は貧弱である。(14a)の場合と同様に、(12)も主節に関係詞節が後続することによって、初めて伝達するに足る情報量を持つようになっている。

福地(2003)は(13)の主節 *Saddam employed maneuvers* を「サダム・フセイン大統領が採った策は」と訳し、「主節の内容は前提であるかのように(関係詞節で包み込むように)読み取るのがむしろ自然であろう」と述べている。この解釈の仕方は(12)の第1文と(14a)にも当てはめて、それぞれ「アメリカで現在開発中のコンピューターは」、「私の知っている女の子は」のように解釈できる。したがって、(13)-(14a)の主節は背景的情報を、関係詞節は前景的情報を伝達することになる。いずれにしても、(12)と(13)-(14a)の主節はそれぞれ提示文と叙述文という違いこそあれ、主節が後続する関係詞節での叙述の地下作り(あるいは、前置き)をするという機能を持っているという点ではどちらも同じである。むしろ、関係詞節の中に取りこまれてしまっていると言ってもいいかもしれない。

(12)-(14a)は主節の伝達する情報価値が低い例だったが、次の(15)は多少事情が異なる。

(15) A study last year by Leif Jensen and his colleagues at Pennsylvania State University found that in 1969, poor children lived in families *that drew 63 percent of their mean income from earnings and only 18 percent from public assistance*. By 1989, the proportion of family income derived from earnings had fallen to 46 percent and the proportion derived from welfare had doubled. As more poor children become dependent on welfare, more may also run the risk of being isolated from middle-class communities and mores.

(*U. S. News & World Reports*, 07/25/94, 31-8)
なぜなら、第1文の *found* に後続する *that* 節の中の主節 *poor children lived in families* は情報価値が低いどころか、「貧しい子供は家庭に住んでいた」と文字通りに解釈すること自体が語用論的に無意味だからである。

(15)の談話内容は子供がいる貧困家庭の収入に関するものである。このため、第1文の主節 *a study last year ... found* は実質的に *according to a study last year by Leif Jensen and his colleagues at Pennsylvania State University* に近い意味を持ち、この談話内容と直接的な関わりを持たない。関わりを持つのはこの主節に後続する名詞節の *that*

in 1969, poor children lived ... public assistance である。

この *that* 節は「1969年には、子供がいる貧困家庭は平均収入の63%を労働収入から得ていて、18%のみが公共の福祉によるものだった」という意味である。統語論的には、この節の中の主節 *poor children lived in families* は関係詞節の *that drew ... public assistance* 以下を従属節としている。だが、主節としての体裁を取ってはいるが、その意味内容を後続する関係詞の *that* に引き継がせて、「子供がいる貧困家庭は」くらいの意味しか表していない。換言すると、主節は *families* を談話の中に導入するだけで、それ以外の情報を伝達する機能は希薄である。実際、この主節の伝達内容があまりに希薄なために、副詞句の *in 1969* は主節を飛び越して、関係詞節を修飾している。したがって、この部分は、「1969年には、子供は貧困家庭に住んでいた」(主節)よりも、「1969年には、(子供を持つ貧困家庭は)平均収入の63%を労働収入から得ていて、18%のみが公共の福祉によるものだった」(関係詞節)としか解釈できない。

(10)の第2文も関係詞節が談話の流れの中にある例と分類することができる。ただし、(12)-(15)とは異なり、この文には関係詞ばかりでなく、主節そのものにも十分な情報が含まれている。主節の *Sculley was reading ... in early 1990* と関係詞節の *that, he concluded, applied squarely to him* を談話内容と照らし合わせてみると、関係詞節の方が談話内容と関わりを持ち、情報伝達の中心となっていることがわかる。

また、(10)の第2文を(10')のように書き換えても、知的意味が同じであることから、主節は関係詞節に対して背景的情報を伝達している。

(10') *Still, while he was reading a report by the McKinsey & Company consulting firm one day in early 1990, Sculley concluded it applied squarely to him.*

同時に、(10)の第2文が統語論的には異なる(16)と意味的に平行関係にあるのは興味深い。

(16) *We came home when it was raining heavily.*
(=When we came home, it was raining heavily.)
なぜなら、(10)の主節は(16)の主節に、また、(10)の関係詞節は(16)の副詞節に対応し、それぞれ背景と前景になっているからである。

主節と関係詞節の両方に十分な情報を含んでいるという点では、(3)-(4)も(10)の類例と言える。(3)で、関係詞節の中で倒置が起きていたり、(4)で、

話し手の陳述態度を表す離接詞が生じていることがいっそう文末焦点 (end-focus) や文末重点 (end-weight) を置きやすくなっている。したがって、関係詞節が前景となり、主節が背景となる。第1節で背景型としていた (2)-(4) の関係詞節は、実際には、前景型と言える。

5. 主節と関係詞節の両方が談話の流れの中にある場合

(11c) の例として (17) がある。

(17) Somewhere in the steaming jungles of the Carboniferous Period there emerged an organism *that for the first time in the history of the world had more information in its brains than in its genes*. It was an early reptile *which, were we to come upon it in these sophisticated times, we would probably not describe as exceptionally intelligent*. But its brain was a symbolic turning point in the history of life.

(Carl Sagan, *The dragons of Eden*, p. 49)

この談話の流れはおおよそ次のようになる。

「石炭紀時代の蒸し暑いジャングルのどこかに生物が現れた」(MC in S1) → 「その生物は遺伝子よりも脳により多くの情報を備えていた」(RC in S1) → 「それは虫類で」(MC in S2) → 「生物が高度に進化した今の時代なら、並外れた知性を備えているとたぶん言うことはないだろう」(RC in S2) → 「だが、その脳は生物の歴史の中で転換期を象徴するものだった」(S3)

この例では、主節 (第1文)、関係詞節 (第1文)、主節 (第2文)、関係詞節 (第2文)、第3文の順で談話が流れていることから、第1文と第2文が連続型の関係詞節を含んでいる。

(10) と (12)-(15) では、談話の流れが関係詞節にしか関わることがなかったが、(17) の第1文と第2文では、単一の文にもかかわらず、談話は主節と関係詞節の両方にに関わり、この順番で連続的に流れている。

第1文の主節 Somewhere ... there emerged an organism は存在文である。存在文は提示文である。この提示的な主節に後続する関係詞節 *that for the first time ... in its genes* は叙述文である。このため、主節によって an organism を談話の中に新たに導入し、それを関係詞の *that* という形にして表示し直して、後続する *for the first time ... its genes* がその関係詞についてコメントを加えるという二段階の情報伝達の仕方を行っている。

Lambrecht (1994, p. 180) によると、このような提示的な主節に後続する関係詞節は統語論的には従属節であっても、単独の文としての機能を持つことがある。実際、(17) の第1文は次のように二つに分割しても、知的意味はほぼ同じである。

(17') a. Somewhere in the steaming jungles of the Carboniferous Period there emerged an organism. *For the first time in the history of the world, it had more information in its brains than in its genes.*

この点で、主節が同じ提示文であっても、伝達される情報量が少ない (12) の提示文とは対照的である。(12) では、主節の提示文は指示物 (computers) を談話の中に導入するのみで、それ以外に伝達する情報量がわずかであるのに対し、(17) の提示文は単独で伝達できる情報量が充分だからである。

また、第2文の関係詞節が主節と一体ではなく、単独で別個の情報を伝達していることは、談話の流れからだけでなく、第3文の *but* が関係詞節の内容に言及していることから明らかである。主節は叙述文であるが、(17'a) と同様に、これを次のように二つに分割しても、知的意味はほぼ変わらない。(McCawley (1981, p. 124) によると、述部名詞 (predicate noun) に後続する関係詞の先行詞は直前の述部名詞ではなく、主語である。したがって、関係詞 *which* の先行詞は an early reptile ではなく、主語の *it* である。)

(17') b. It was an early reptile. *Were we to come upon it in these sophisticated times, we would probably not describe it as exceptionally intelligent.*

ところで、(18a) は第2文と統語構造が同じである。

(18) a. Paris is a city *that is most beautiful in May*.
b. ?Paris is a city. *It is most beautiful in May*.
c. Paris is most beautiful in May.

(福地, 2001, p. 22)

主節の Paris is a city は叙述文だが、福地 (2001) はこれを「情報量のない主節」だと述べている。当然、関係詞節に情報伝達の中心がある。この理由は、語用論的に見て、述部の a city には伝達すべき情報量がなく、言わば、無色透明な存在であり、主節と関係詞節をつなぐ機能しかない。このため、主節と関係詞節を分割すると、(18b) のように容認されないからである。福地 (2001, p. 22) の言葉を借りると、「主節は主題を明示するための単なる統語枠としてのたらしきしかない」ためである。実際、福地

(2001) が述べているように、(18a) は (18c) のようにしても、知的意味が変わることがない。

だが、(18a) を (18b) のように二つの文に分割できないにもかかわらず、同じ構造の (17) の第2文では (17'b) のように可能である。これは、(17) では、関係詞節だけでなく、主節にも単独で伝達できるだけの情報が含まれているためである。

以上から、(17) のように、主節と関係詞節の両方が談話の流れの中に含まれるためには、主節に十分な伝達情報が含まなくてはならない。

ただし、(11b)-(11c) のうちのどちらのタイプの文なのか直ちに判断するのが難しいことがある。

(19) ... maintaining the drug habit becomes the only valued activity in life, as everything else fades into insignificance. In an experiment conducted by James Olds, a rat was placed in a cage with a lever attached to a wire *by means of which a current was applied to an electrode implanted in the reward centre of its brain*. Every time the rat pressed the lever, the electrode stimulated a little burst of dopamine similar to the rush produced when a human snorts a line of cocaine. It was not long before the rat was spending all its time pressing the lever repeatedly, ignoring everything else around it, even food - a perfect image of the human drug addict.

(Dylan Evans, *Emotion*, p. 68)

(19) の第2文だけを見ると、次のように、主節から関係詞節へ談話が流れているように見える。

「電線が接続されているレバーを取り付けたかごにねずみを入れた」(MC) → 「そのレバーを使うと、(ねずみの) 脳の報酬領域の中心部に埋めこまれた電極に電流が流された」(RC)

だが、後続する第3文と第4文の意味内容を考慮すると、「ジェームス・オールズの実験」とは、関係詞節の「ねずみの脳の報酬領域の中心部に埋めこまれた電極に電流を流す」ことによって、その反応を見ることで、主節の「ねずみをかごの中に入れる」ことではないはずである。少なくとも、主節よりも関係詞節の意味内容の方が実験の眼目のはずである。

もしも、主節と関係詞節の両者が同程度の断定性を持ち、談話と関わりとすれば、どちらか一方を削除しても、後続する第3 - 4文とのつながりが途切れるはずである。

(19') a. A rat was placed in a cage with a lever

attached to a wire. (関係詞節を削除)

b. By means of a lever, a current was applied to an electrode implanted in the reward centre of its brain. (主節を削除)

だが、実際には、(19'a) では、後続する第3-4文の談話内容と結びつきにくくなるが、(19'b) では、それほどでもない。また、第1文は第2-4文以下の主題文 (topic sentence) であるが、この文の意味内容から考えてみても、(19'b) のように、主節の意味内容がなくなっても第2-4文の支持文 (supporting sentences) の主旨は大きく変わることがない。したがって、談話の流れから見ると、関係詞節が中心的な情報であり、主節が背景、関係詞節が前景となる。

背景と前景をどのように選択するかは話し手や聞き手が現実をどのように認知しているのかを反映する。主節と関係詞節のどちらが背景で、どちらが前景になるのかを決めるのは単一の文だけでは不可能で、前後の談話内容によって最終的に左右される。(19) の第1文はその好例である。

6. まとめ

単一の文だけを見ると、主節との間に物語的つながりが成立するかどうかによって、関係詞節は背景型と連続型に分けられる。だが、談話の観点から見ると、背景型の関係詞節の一部は、実際には、主節の前景となり、談話の流れの中に含まれる。つまり、前後の文と物語的つながりを持つ関係詞節がある。このような関係詞節は背景型というより、むしろ、前景型であり、逆に、主節は背景である。

前景型の関係詞節の場合、副詞類が主節の中に位置していても、主節を飛び越して、関係詞節を修飾することがある。また、接続詞が主節ではなく、関係詞節の意味内容に言及することもある。

前景型の関係詞節を含む文では、主節の情報量が少なかったり、語用論的に不適切なことがある。このような主節は提示的・叙述的いずれの時であっても、主節で提示された指示物やその伝達内容について、関係詞節の中でコメントが行われる下地作りをすることによって、背景となる。主節に十分な情報量が含まれている時には、談話内容によって背景にも前景にもなる。

連続型の関係詞節の場合にも、提示文・叙述文の両方が主節の中に現れる。談話は主節から関係詞節へと流れていくが、このような時、主節には十分な伝達情報が含まれていなくてはならない。主節の伝達する情報量が不十分な時には、関係詞節は連続型

にはならず、前景型となり、情報伝達の中心となる。当然、主節は背景となる。

関係詞節と主節のどちらが背景となり、また、前景となるかという判断は単一の文ではなく、談話内容が最終的な決め手になる。

引用文献

Fairclough, N. (1973). Relative Clauses and Performative Verbs. *Linguistic Inquiry* 4, 526-531.
Hooper, J. and S. Thompson (1973). On the applicability of Root Transformations. *Linguistic Inquiry*, 4, 465-498.

Lambrecht, K. (1994). *Information structure and sentence form*. Cambridge University Press

McCawley, James D. (1981). The syntax and semantics of English relative clauses. *Lingua*, 53, 99-149.

福地肇 (1995). 英語らしい表現と英文法. 研究社.

福地肇 (2001). 情報量のない主節に続く関係詞節. *英語青年*, 147 (5), 22-3.

福地肇 (2003). 主節・従属節の英文解釈. *英語青年*, 149 (4), 204-206.

女鹿喜治 (2002). 主節と関係詞節の断定について. *英語語法文法研究*, 9, 141-155.

The characteristics of information conveyed by main and relative clauses—a view from discourse

Kiji MEGA*

Abstract :

This paper attempts to explore the characteristics of information conveyed by main clauses and indefinite relative clauses. Traditionally, these have been categorized under two types: those which carry continuative information and those which assume background information. However, some of the latter may also said to convey foreground information, effectively forming third category. In relatives of this third type, adverbials and conjunctions in the initial position refer to relative clauses rather than main clauses. If the information in main clauses is insufficient or pragmatically inappropriate, they take on background information and thus effect a scene-setting function for relatives. On the other hand, if main clauses contain sufficient information, they may be either foregrounded or backgrounded. In sentences containing continuative relatives, main clauses have to assume full information so that events in main and relative clauses can be connective in serial order, forming a narrative. Finally, discourse will determine whether main clauses have foreground information or not.

Keywords:

relative clauses, main clauses, foreground/background, discourse

* Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing

